

文藝春秋
の 新 刊
3月20日 発売
1750円 + 税

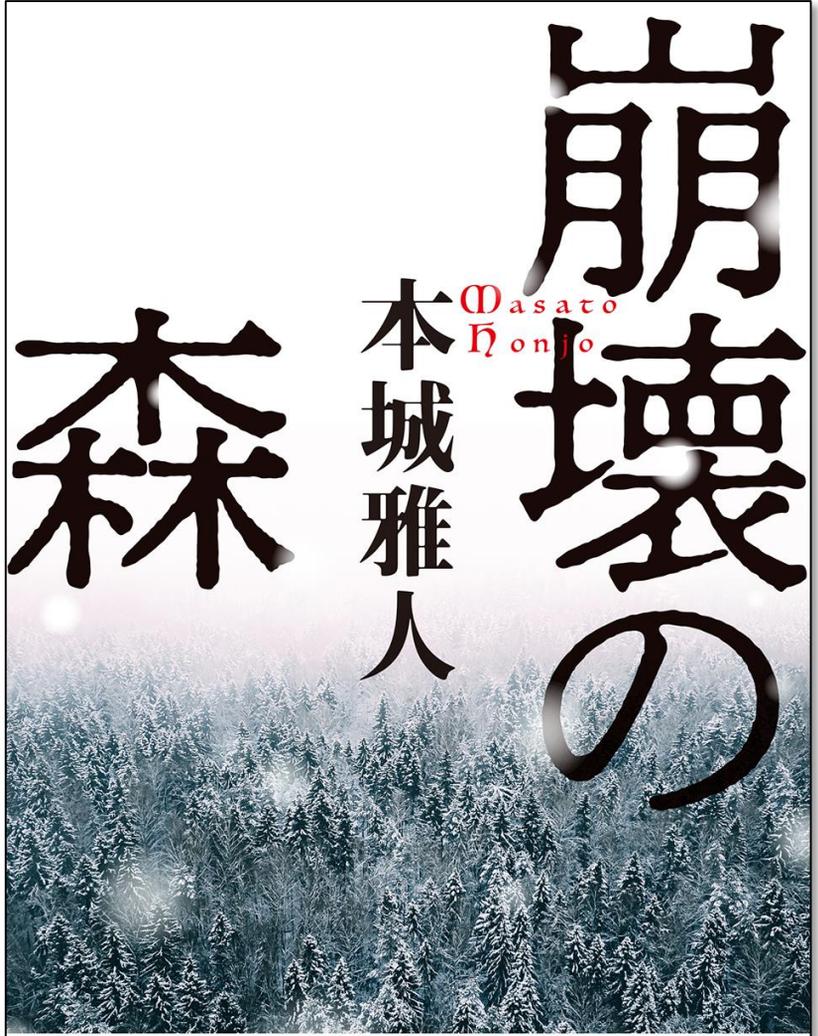
崩壊の森

崩壊の

森

本城雅人

Masato
H. Onjo



文藝春秋

『トリダシ』を横山秀夫さんが絶賛し、
『ミッドナイト・ジャーナル』で吉川英治文学新人賞、
『傍流の記者』が直木賞にノミネートした
本城雅人
が満を持して放つ
ソ連崩壊前夜、世界的スクープを連発した日本人特派員の物語。

——今晚、クレムリンの旗が降りるぞ。

この日の夕方、一人のウオッカ友達が生かされてくれた。炎のように赤い地に金色の星と、鎌と槌が組み合わさった巨大な社会主義国家「ソビエト連邦」を象徴する赤旗、それが降ろされるといふのだ。土井垣はそのシーンを、日本から応援に来てくれた二人の同僚、そして妻の咲子と一緒に見たいと思った。みんなで歴史的瞬间に立ち会い、それぞれの目に焼きつける。それが将来の東洋新聞にとって大きな財産になる。

(本文より)

ほんじょう・まさと

著者略歴:1965年神奈川県生まれ。明治学院大学卒業。産経新聞入社後、産経新聞浦和総局を経て、その後サンケイスポーツで記者として活躍。退職後、2009年『ノーパディノウズ』が松本清張賞候補となり、デビュー。同作でサムライジャパン野球文学賞受賞。2016年『トリダシ』が大藪春彦賞候補、吉川英治文学新人賞候補に。2017年『ミッドナイト・ジャーナル』で吉川英治文学新人賞受賞。2018年『傍流の記者』が直木賞候補に。他の著書に『英雄の条件』『監督の問題』『時代』など。

【あらすじ】チェルノブイリ原発事故から1年――1987年4月、東洋新聞の記者・土井垣侑(どいがきたすく)が特派員としてモスクワに降り立った。当時のソ連はペレストロイカ政策が進められていたが、記者はソ連政府の管理下でしか取材をすることができず、しかも本社からは当局を刺激しないよう「特ダネ禁止」を言い渡されていた。そんな状況に不満を抱いた土井垣は、独自ネタを拾おうと精力的に街へ繰り出す。だが、ソ連政府は一記者にまで監視の目を光らせていて.....。

まだ本城雅人の面白さを知らないなんて、もったいない！ 担当編集者

著者インタビュー、書評などご検討ください！

[お問い合わせ先]株式会社文藝春秋

プロモーション部 電話:03-3288-6142 mail: pr@bunshun.co.jp